

森山和浩氏

日本フォレスト株式会社代表取締役社長

トップ
対談

聞き手／井野誠司
(株)NCBリサーチ&コンサルティング代表取締役社長

持続可能な エネルギーを育む

政府の2050年までのカーボンニュートラル宣言により
再生可能エネルギーへの関心が高まっている。

FIT 制度以前から、木質系の産業廃棄物を利用してリサイクルチップを製造・販売していた
日田市の日本フォレストは

2013年に木質バイオマスエネルギーを活用した発電事業に参入。

2016年からは日田市内の公共施設などへ電気の供給を開始し、電力の地産地消を実現した。
さらに2021年には山林事業をスタートし、森林再生にも取り組んでいる。

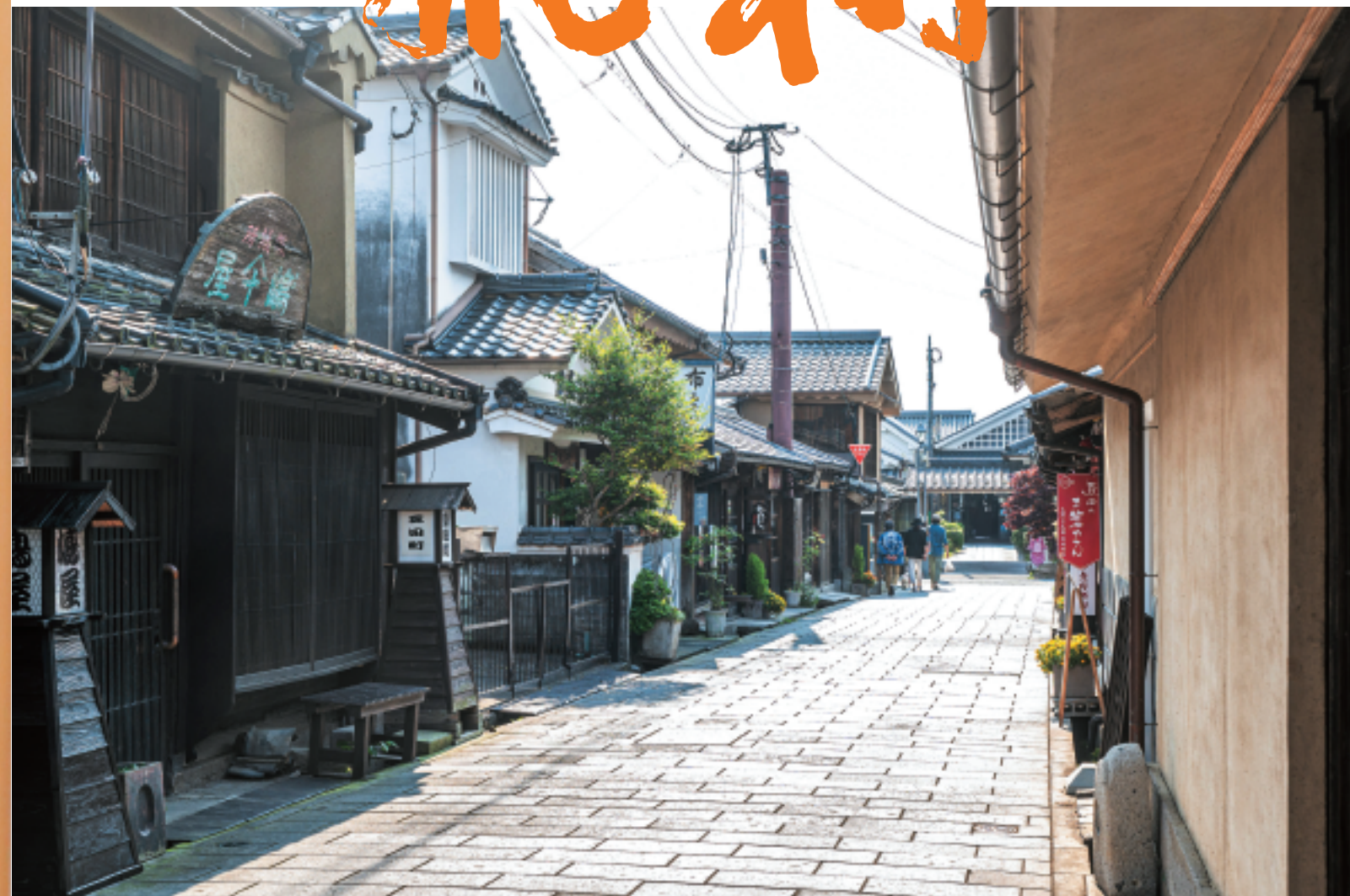
かつて林業の町として栄えた日田に、新たな木材需要を創出し
生産者の所得向上や雇用創出、林業活性化に貢献している森山和浩社長に、その思いを伺う。

飛翔

2025

6

2025.6.15 vol.382



トップ対談

持続可能な エネルギーを育む

日本フォレスト株式会社
代表取締役社長 森山和浩氏

Z世代を知る

1375人が受講した新入社員研修

(株)NCB リサーチ&コンサルティング取締役 岸田洋邦

「定年まで同じ会社で働きたい」が 増加に転じる

2025年度新入社員意識調査

(株)NCB リサーチ&コンサルティング調査部長 山下 剛

グローバル経済の「いま」を読む

インフレは持続するのか

東京大学名誉教授 伊藤元重



西日本フィナンシャルホールディングス

株式会社 NCBリサーチ&コンサルティング

電気を地産地消する

井野 ●事業のコンセプト「自然を守りながら森林資源を有効活用し、街と未来に明かりを灯す」は、御社の活動を見事に言い表していますね。まず、事業の全体像をお聞かせいただけますか。

森山 ●当社の親会社は1998年に私の父がつくったモリショウという会社で、破碎機の販売をしていました。ただ、当時はリサイクルが進んでおらず、木材チップをつくっても流通先がないので、破碎をしないし、機械も売れない時代だったんです。

リサイクルの意識はあったのですが、チップが売れなければ機械設備に何千万円の投資はしませんでした。私が入社したのはそういうタイミングでした。入社した私は、破碎機を単品で売るのはなく、破碎したチップの選別設備などをプラント化してチップのクオリティを向上させれば、販路の選択肢が広がり、機械の販売が増え利益率が上がるのではないかと考えて、プラント化にシフトしていったのです。

すると、20年ほど前から木質チップが足りなくなるほど需要が増えました。というのは、2002年に「新エネ法」の政令改正によりバイオマス発電が新エネルギーの中に位置付けられ、木質バイオマス発電の時代がスタートしたからです。それから木質チップが必要とされるようになり、機械がたくさん売れ始めました。

そして、自ら木質チップを製造するためにつくったのが日本フォレストです。2004年のことです。そのチップを、いろいろな地域の木質バイオマス発電所に供給することで、安定期が訪れました。

道路やダムをつくったり、鉄道を通したりする工事では木が伐採されます。そうして出た廃棄物を木質チップとして有効活用する時代がきたのです。

我々が生まれ育った大分県日田市は林業が地域を支えてきました。木質系廃棄物は100%リサイクルできる時代がきたのに、当社は日田市の林業の底支えになっていないということに途中で気づきました。

林業を再生させるために何かをしなければいけません。そこで2013年に林業目線の木質バイオマス発電所をつくり、自ら発電事業に参入しました。

食べ物だと、食べ残しがあつたり、おいしかったよというお客様の声が耳に届いたりします。けれど、我々がつくっている電気は、ニオイも色も形もありません。そこで、我々がつくった電力は我々が見えるお客様のところに供給することにしました。日田市役所をはじめ、日田市内の給食センター、総合運動公園、図書館、すべての小中学校に電力を供給しています。この評判が広がって、今は宮内庁赤坂御用地にも電気を供給させていただいています。

このようにお客様の顔が見えるようになったことで、当社に木を持ってきたり、ただの方たち、発電所や工場で働いている方たち、当然私も含めて、仕事に対する誇りが生まれてきました。

次世代のために責任をもって林業と向き合う

井野 ●電気の地産地消など、ご先祖様は想像もしていなかったでしょうね。

森山 ●祖父母世代の人は、発電の燃料にするつもりで木を植えたのではないと、たぶん怒っていると思います。

木は手を加えなくても生長します。40、50年後をイメージしながら、祖父母世代の人は木を植えていたわけです。けれど、父や母の世代も、私たちの世代も、キツイ、汚い、危険、儲からないと言われている林業をしたとは思いませんでした。

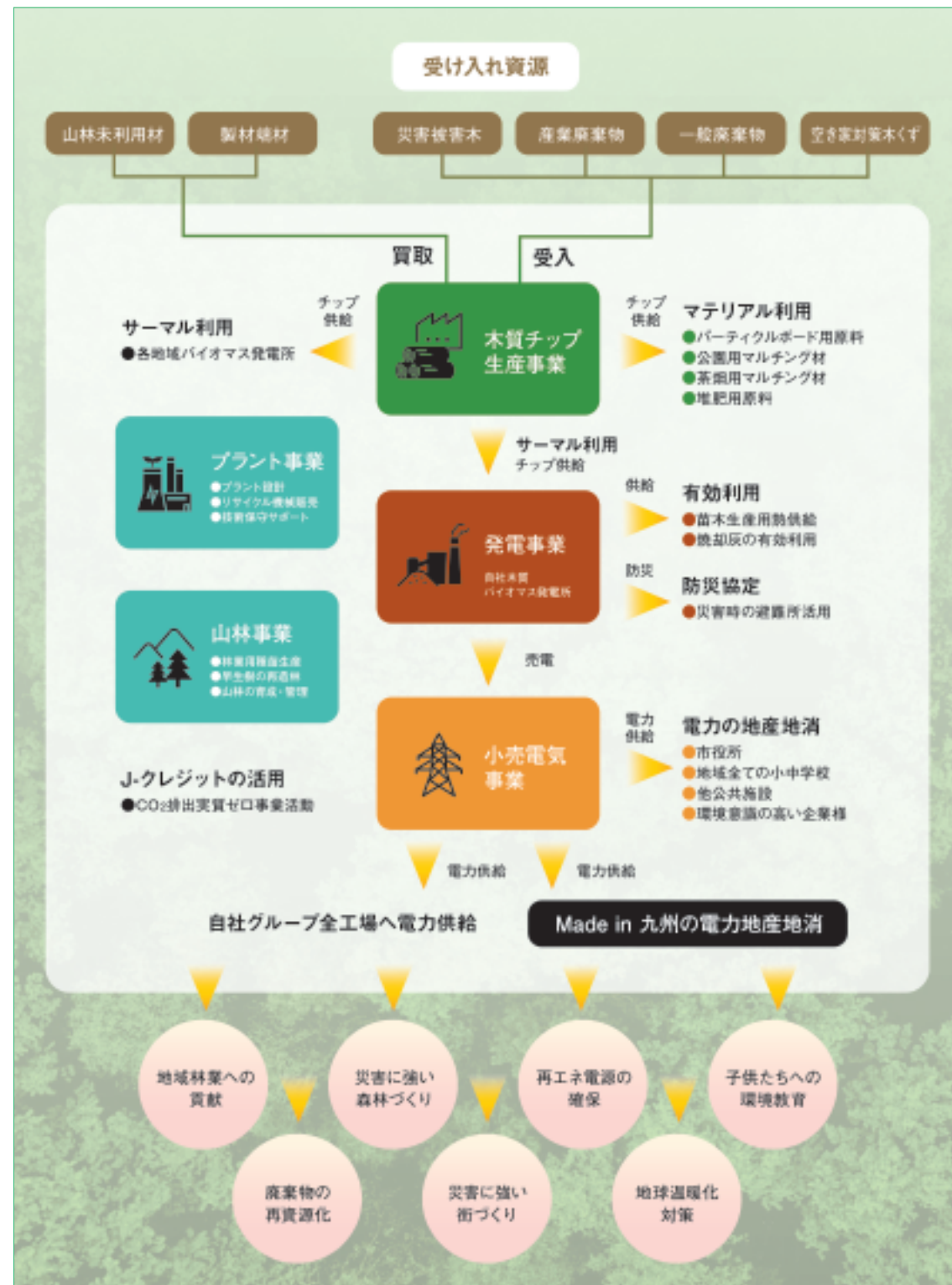
その結果、一切木の手入れをしていない山が生まれてしまったのです。

山は、間伐をして太陽が当たる環境を整えると、葉が落ち、腐り、腐葉土になって、土が良くなります。そこに雨が降り、根が張って木が育つので

す。そうして育った木が、家の柱や梁をはじめ、大阪万博の大屋根リングなどになります。

しかし、手入れをしていないので、日本の山は細い木が乱立してしまっています。これで何が起きるかという、根が張っていないから大雨で木が倒れ、そこに雨水がたまり、自然流木ダムとなつて鉄砲水が発生し、災害が起るのです。日本の山の多くがそうになっています。これは天災ではなく人災ですね。

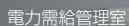
当社は手入れをした木がある一定の価格で買い取り、発電燃料として使っています。ある一定の価格とは、林業従事者さんが「面白いね」「やってみようか」と思える価格帯です。結果として、商売のスキームは成り立ち、地域の山が再生され、災害が起きにくくなっています。



2017年の九州北部豪雨では、日田や朝倉地方などで、とんでもない量の災害流木が発生しました。林野庁は、当社の名前を出さ



日本フォレスト本社にて。右が森山社長、左が弊社代表・井野



かが大切です。

電所でつくった電力を使っています。

のです。

そこで、Jクレジットを買い付けて毎月カーボ

という文書を出しました。

のかと考えてできたのが、前ページの図です。

当社が使っている資源は、山林未利用材、製材

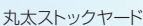
これも人災ですね。

国が少しずつアクセルを踏み始めています。

組んでいることです。

あげたもので、苗木を育てています。

ら2年以内に再造林するというルールがあります



次の時代を見据え、
未来への挑戦を続ける

います。

し広い地域で展開するお考えはありませんか。

し広い地域で展開するお考えはありませんか。

根付いて真剣に1つひとつやっているのです。

かが大切です。

電所でつくった電力を使っています。

そこで、Jクレジットを買い付けて毎月カーボ

はげ山が残っています。

未来を考えずに植えたらどうなるでしょうか。

す。

できるかは、なんとなく想像できます。

ために我々のやっている事業スタイルです。

ものと品質は同じです。

つくと唯一無二の企業体が生まれます。これが

りますね。

です。

つ企業として生き残れるのではないでしようか。

があるのでは？ と問いかけて、納得してもらい

る人たちの思いも違うのではありませんか。

業も増えました。また、嬉しいことに雇用も生ま



森山 和浩(もりやま・かずひろ)
代表取締役社長

1979年生まれ。大分県出身。設計専門学校卒業後、2003年モリショウ入社。設計プラント技術を活かし、発電所建設のプロジェクトリーダーとして計画、管理、体制を統括。2010年よりモリショウ代表取締役役に就任、2012年に日本フォレスト代表取締役役に就任後現在に至る。

概要

名 称	日本フォレスト株式会社
本 社	大分県日田市大字東有田2813番地22 www.n-forest.jp
設 立	2004年 4 月
業務内容	木質バイオマス発電事業、木質バイオマス生産事業、環境システム事業、山林事業
工 場 等	宇城工場、南関工場、天瀬工場、中津工場、天瀬発電所、南関発電所、本社第2工場、中津第2ヤード、種苗センター、財津育苗場、湯山採穂園、東京営業所、大阪営業所
グループ会社	株式会社モリショウ、日田グリーン電力株式会社

沿革

1998年	有限会社モリショウ設立
1999年	株式会社モリショウに組織変更
2004年	株式会社九州ウッドマテリアル設立
2006年	日田市大字東有田2813番地22（ウッドコンビナート）へ本社移転
2010年	モリショウ、九州ウッドマテリアルの全株式を取得（子会社化）。株式会社グリーン発電大分（現・日田グリーン電力）設立
2012年	九州ウッドマテリアルを日本フォレスト株式会社に社名変更
2013年	日本フォレスト熊本工場・天瀬工場操業開始。日本フォレスト、木質バイオマス事業者認定を取得。グリーン発電大分が5,700kwの発電運転開始
2016年	モリショウが日田グリーン電力株式会社設立
2017年	日本フォレストが経済産業省より地域未来牽引企業に選定
2019年	日本フォレストが林業種苗生産センターを開設
2020年	日本フォレストが山林事業部を設置。日本フォレスト中津工場操業開始
2021年	モリショウグループが「脱炭素チャレンジカップ2021」にて環境大臣賞グランプリを受賞。日本フォレストが林業種苗生産センター財津育苗場を開設
2022年	モリショウグループが資源エネルギー庁より「地域共生型再生可能エネルギー顕彰」の事業者に選定

し、社員に方向性も示せだし、父も新たな人生を歩むきっかけになりました。

会社は木と一緒に、植えて終わりではなく、つくってからが勝負です。

井野 ● 良い事業承継ができましたね。

今後の課題としては何があげられますか。

森山 ● この地域に人が少ないことです。大学がないので若い人は福岡、大阪、東京に行って帰ってきません。地方でいかに人を確保するかが大きな課題です。魅力ある会社ができているとはいいつつも、一般の方たちが目にするのではない会社ですし、雇用に結び付けられるアナウンスもできていません。アナウンス力があれば人の目に留まって、あの会社で働いてみたい、となるんでしょうけれど……。どんな平均年齢が高くなっているのか、かなり悩んでいます。

井野 ● 働きがいや働く意味にこだわって仕事を探している人も大勢います。そういう人たちの目に

留まれば、話を聞いてみようという気に十分なると思います。

ところで、将来的には林業への参入もお考えですか。

森山 ● いいえ。現在、林業に従事している人たちにプロの仕事をしていただいて、そこから生まれたものを我々が利用させていただいています。

当社が林業に入ると、地元でがんばろうとしている林業家の仕事を奪ってしまうことになりかねません。私は地域でガッツのある林業家さんを強くしたいのです。

トラックもたくさん持っていますが、運送業はしません。運送業に力を入れているところに仕事をしてもらっています。何でもひとり占めはよくないですからね。

井野 ● 地域の雇用のことまで考えて事業を展開しておられるんですね。

本日はありがとうございました。

*対談を終えて

井野誠司

国語辞典の代表格『広辞苑』に掲載される語釈は、時代と共に変化しています。例えば「やばい」。第6版（2008・1）では「不都合である。危険である」でしたが、第7版（2018・1）はこれに「のめり込みそうである」が加わりました。

言葉とは、どこかの誰かが元々の意味と異なる使い方をしても、それが日常に浸透しこれから先も定着しそうだとすると、『広辞苑』ほどの辞典の語釈を書き換える力を持つということのようです。

森山社長が構築した日田の森林資源循環モデルは、言うなれば電気の地産地消。この「地産地消」を『広辞苑』でひくと、「ある地域で収穫した農水産物をその地域内で消費すること。この語釈を「ある地域で収穫した農水産物または作り出された電気を……」に書き換えるほどの力を、日本フォレスト製地域モデルは持っています。やばいです。



日本フォレスト天瀬発電所全景

常に最新の情報と環境にふれる

井野 ● このたびは弊社に5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）活動支援をご用命いただきありがとうございます。5S活動を思い立ったのは何かきっかけがあったのですか。

森山 ● はい。ビジネスでたまに会う新潟の友人が久しぶりに当社に遊びに来てくれた時、工場を見て「オタクの会社は5Sがなっていない」と指摘してくれたのです。

当社では毎月1回、各工場を別の工場の人たちと見て評価する安全パトロールをずっとやっていたので、それで満足していたんです。しかし、第三者から「5Sがなっていない」と言われて衝撃を受けました。それで5S活動に取り組もうとネット調べ、御社のホームページにたどり着いたのです。

コンサルで学んだように、発表会を開いて、会社からのインセンティブを決めて、いまその取り組みの真っただ中です。みんな勝ちたいので、みるみる綺麗になっています。

井野 ● 幹部社員向けコンプライアンス研修もご用命いただきました。

森山 ● 私も以前はいろいろな情報を得るためにセミナーにも積極的に行っていました。ただ、私はなく、幹部たちに参加してもらいたいと思っています。時間を割いて会場に行けば、その場にいないだけで聴く体制になります。それに、私が発信するよりも、プロに教育、アドバイス、指導をしていただくほうが、前のめりで聴くので、効果が違います。今後、幹部だけでなく数字や情報を扱う人たちも含めて、積極的に参加してもらいます。

多くの経営者の方たちは、問題点を客観視する力が優れています。自分たちの変化に気づき、速やかに対応し、後回しにしません。経営者は常にホットな情報と環境を肌で感じておかないといけません。それが私のベースにあり、そのためにも研修は必要だと考えています。

持続可能な地域社会のために

井野 ● お話を伺っていると、社員のみなさんが誇りを持ってお仕事なさっているのがよくわかります。

森山 ● ありがとうございます。当社は離職率が低いのです。以前は、父と私と経営者が二人いたのですが、社員は混乱することがありました。それで父が早期にバトンタッチしてくれたのです。嬉しかったですね。創業者でし、私より長い時間軸を持っていたので、もっと働きたいと考えていたと思いますが、きっと私の感覚に期待してくれたのでしょう。早めの引退は、私の成長にもつながる